



Data

監督: メラニー・ロラン
 原作: ニック・ピゾラット『逃亡のガルヴェストン』
 出演: エル・ファニング/ベン・フォスター/リリ・ラインハート/アデベロ・オデュエ/マリア・バルベルデ/C・K・マクファーランド/ポー・ブリッジス

■ショートコメント■

◆「ガルヴェストン」って一体ナニ? ニック・ピゾラットの原作『逃亡のガルヴェストン』を読んだ人なら、それがメキシコ湾に浮かぶ細長い島で、テキサス州最大の都市であるヒューストンから南に80キロほど下がったところにあるビーチリゾートとして有名な観光地だということを知っているかもしれない。しかし、ほとんどの日本人はその島の名前を知らないはずだ。

また、ガルヴェストンを含むメキシコ湾岸は、巨大ハリケーンに頻繁に襲われる地域としても知られているらしいが、本作冒頭とラストにみるハリケーンを予告する姿も、ほとんどの日本人は理解できないはずだ。

しかし、導入部で提示される“ドンパチ”の結果、本作が、ヤクザ組織から切り捨てられた男ロイ（ベン・フォスター）と、不遇の若い娼婦ロッキー（エル・ファニング）の逃避行（ロードムービー）であることがわかり、その行き先がガルヴェストンであることがわかると、そのタイトルに、なるほど、なるほど・・・。

◆本作の監督は『イングリシアス・バスターズ』（09年）（『シネマ23』17頁）で、強烈な印象を残したフランスの美人女優メラニー・ロラン。『TOMORROW パーマネントライフを探して』（15年）（『シネマ39』210頁）では、農業、エネルギー、経済、民主主義、教育をテーマとするドキュメンタリー映画の監督として見事な才能を世に示したが、本作のテーマはあまりにもありふれているのでは・・・?

そんな心配もあったが、さすが美人女優が監督しているだけあって、美人女優エル・ファニングの服装をはじめ、その使い方はお見事。また、ラストではあつという間に「それから20年後」の映像になるからビックリだが、そこではもう一人、成人した娘役を演じ

る女優リリ・ラインハートの姿も・・・。

ラストに向けての本作のストーリー展開は少し違和感（手抜き感？）があるが、この女優の登場があれば、まずまず・・・。

◆かつて『ガン告知』は「余命〇〇年」という死の宣告に等しかったが、今は全然そうではない。しかし、本作冒頭における、白くもやのかかった肺のレントゲン写真を見せられながらの医師の説明によると・・・。もっとも、それが「余命〇〇ヶ月」宣告だと悟った（早とちりした）ロイは、医師の説明を拒否して病院を出て行ったから、正確なインフォームドコンセントはないはまだ。

しかして、その後のロイの行動を見ていると、まさに「死の宣告」を前提としたヤケのヤンばち的行動が目につくし、モーテルに入ったロイが血を吐く姿を見ていると、まさにロッキーを連れてのロードムービーは死の旅。

そう思っていたが、ボスからの襲撃を逃れる際の車の衝突事故で意識不明になったロイが病院での検査を終えて目を覚ますと、そこでの医師の病状説明は意外にも・・・？なるほど、こんなラッキーな早とちりだったからこそ、本作ラストではロイの20年後の姿がスクリーン上に登場したわけだが、ストーリー構成におけるその是非は・・・？

◆“ナニワのモーツァルト”と呼ばれた作曲家キダ・タローの唯一最大のヒット曲が、北原謙二が歌った「ふるさとのはなしをしよう」（65年）。その歌詞で歌われた風景は、松山生まれの私にもよくわかる懐かしい風景だが、殺し屋のロイが絶望のロードムービーの行き先として選んだ故郷のガルヴェストンは、その歌詞とは全然違う、まさにガルヴェストンの風景だ。その美しさには息を呑むものがあるだけに、そこで数日間の安穏の日を過ごすロイとロッキーが、一瞬人生を甘く錯覚したのも止むを得ない。

しかして、なぜフランス人のメラニー・ロランがテキサス州の町ガルヴェストンを舞台とした本作を監督したのかを考えながら、本作をじっくり楽しみたい。

2019（令和元）年6月5日記